

〔講演概要〕

私の方言研究

－近畿方言から四国方言へ－

岸江 信介

1. はじめに

京都・大阪の方言が近畿地方各地に伝播し、さらには近畿圏以外の方言にも影響を及ぼすことは周知の事実である。例えば、国立国語研究所による『日本言語地図』や『方言文法全国地図』をはじめ、全国の方言分布を対象とした言語地図からこのような近畿中央部からの方言の拡散の状況について知ることができる。ただ、いずれも全国規模の調査にもとづいており、京都・大阪など近畿中央部からの近畿周辺部、さらには四国地方にかけての詳細な状況についてこれまでほとんど明らかにはされてこなかった。

このため、近畿地方の中央部や周辺部のほか、四国地方においても言語地理学的調査やグロットグラム調査を企画した。

ここでは、近畿内部での方言伝播の実態、近畿地方から四国地方への方言が拡散する状況についてこれまでの調査結果にもとづき、見ていくことにする。

2. 地理的分布と言語伝播

方言学のうち、言語地理学（最近では「地理言語学」と呼ばれることが多い）は、方言の地理的分布を明らかにしつつ、過去にどのような言語変化が起きたか

KISHIE, Shinsuke 奈良大学文学部国文学科教授、徳島大学名誉教授

を推定し、ことばの歴史を再構成することが主な目的である。地理的な分布を形成する前提として、方言の地理的伝播を常に考慮しておく必要がある。どのような方言形式がどの地域（地点）から伝播を開始し、どのような経路を辿って拡散したかということである。一般的には、文化的な中心地から地方へ広がるというケースが多く、その伝播状況を推定することも可能である。

これまで近畿地方を対象に方言研究を進めてきたが、京都や大阪で生じた変化がどのような広がり方をしたか、近畿、四国、中国など、西日本の各地方での方言調査を通じて明らかにしてきた。

ここでは、そのうち、近畿地方内部での地理的分布について提示するとともに四国地方における調査結果を併せて示すことにしたい。

全国地図である『日本言語地図』『方言文法全国地図』よりもさらに密度の濃い言語地図を作成しつつある。これらの地図を参照すると、全国規模の地図では捉えにくい近畿地方や四国地方での方言分布の詳細を把握できることに加え、方言によっては、近畿地方から四国地方に伝播した直後の状況を見られる言語地図もある。

3. 四国地方における方言の分布形成

四国地方の調査結果からいくつか紹介してみたい。まず、図1は禁止表現の「してはいけない」の「いけない」の部分はどう言うかについて聞いた結果である。四国地方では、～アカン、～イカン、～イケンというように四国東部から西部にかけて並んでいる。このなかで、～イカンは分布領域が広く、四国地方では最もポピュラーな形式である。愛媛県南予地方など四国西部の～イケンは、中国地方では五県とももっともよく用いられる形式である。

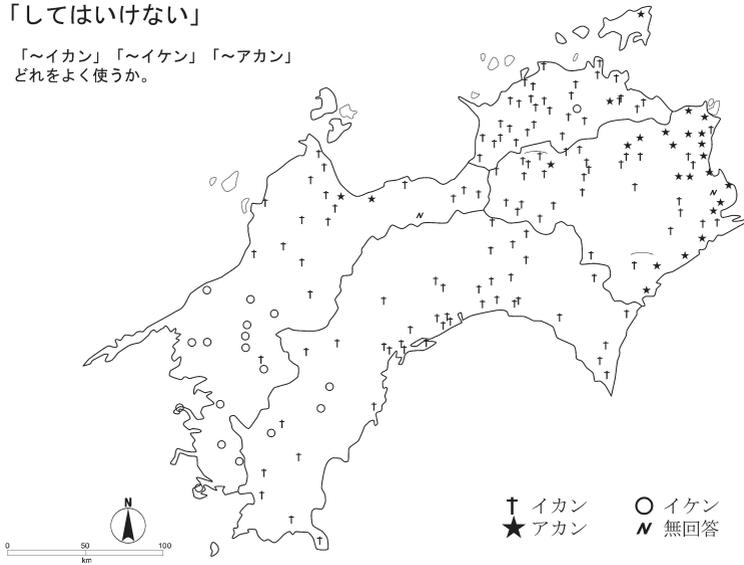
さて、この3つの形式のうち、～アカンは近畿圏から伝播したものである。四国内では東部の徳島県の沿岸に分布しているが、これは徳島市内にいち早く入り込み、そこを拠点として、徳島県各地に伝播しているといえる。

さて、この「いけない」の分布についてであるが、近畿地方以東はどうであろうか。大西編（2016）に掲載されている79図によると、中部地方では～イカンであるが、関東地方では、～イケナイ（～イケネー）がまとまって分布している。

図1 「してはいけない」の「いけない」の部分はどう言うか

「してはいけない」

「～イカン」「～イケン」「～アカン」
どれをよく使うか。



～イケナイの～ナイは西日本の方言では～ンなので中国地方の～イケンと～イケナイが対応する。となると、近畿地方の～～アカン、～イカン、～イケンという順で、東西両方言で分布していることがわかる。方言圏論に準拠すると、～イケンが最も古くその次に～イカン、そして最も新しいのが～アカンということになる。

なお、西日本の場合、～アカンは四国地方には図1のように伝播し、入り込みつつあるが、中国地方では岡山県に入り込めないようである。

ところで、図1では、～アカンが徳島市内から海岸を伝って高知県境付近まで迫っている。

一方、徳島県北部では、吉野川流域を遡るように伝播を内陸部に広げつつあるということができそうである。これまで吉野川流域の南岸域でグロットグラム調査を実施した。グロットグラム調査とは、地理×世代という枠組みで言語調査を実施し、言語（方言）の動態について調べようとする方法である。

図2では～アカンが徳島市内から西へと進んでいる状況をつかむことができる。吉野川流域で注目すべきは、世代が上がるほど～イカンを用いている反面、若い

4. 京阪方言の伝播と拡散

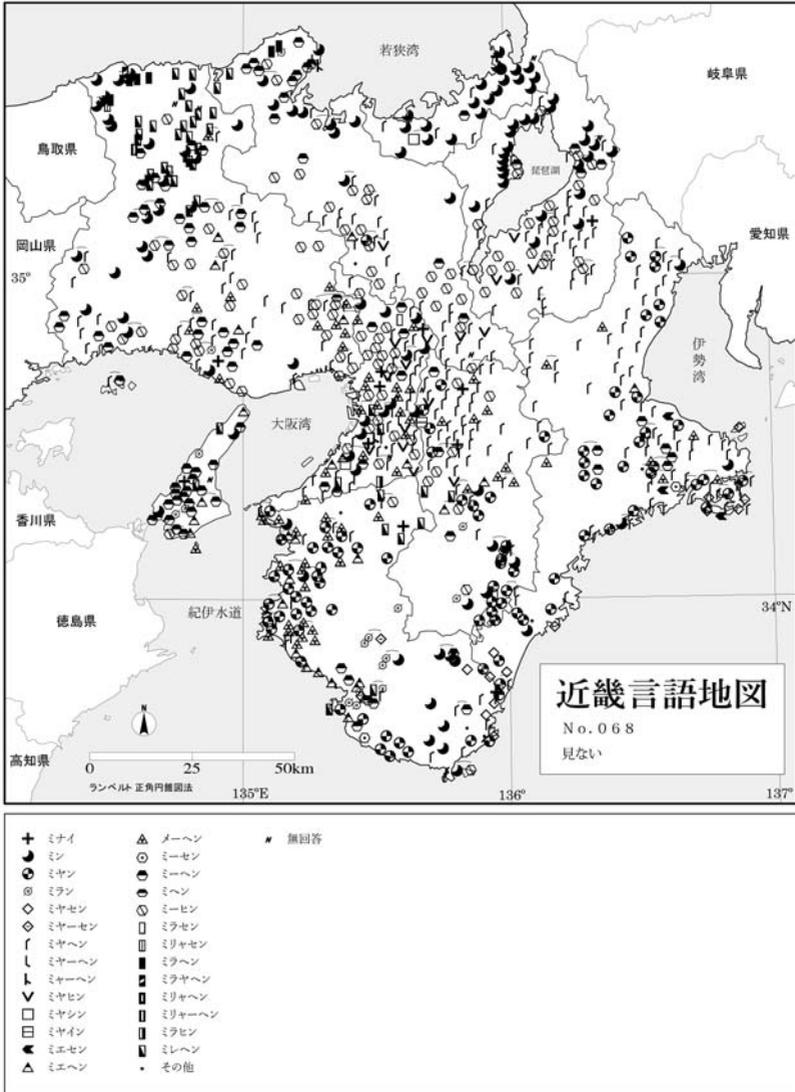
京阪方言は近畿方言の代表ともいえる方言であるが、近畿地方の各地方言をはじめとして、四国地方の方言にも影響を及ぼしてきた。近畿地方では京都・大阪などの中央部から周辺地域へむけての伝播がみられる。このため、周辺域では古い形式が残存する傾向を窺うことができる。例として、図3（「見ない」）に示したように、近畿周辺部ではミンという形式が広がる一方で、近畿中央部から順次、拡散としてみられる

ミヤヘン（京都から広がった形式）、ミエヘン（大阪から広がった形式）、ミーヒン（ミヤヘン拡散のあと、新たに京都から広がった形式）などがみられる。ミヤンは和歌山県と三重県などに集中しており、近畿周辺域で用いられる形式であるが、近畿中央部で使用されたものではなく、いずれかの県で生じ、使用が両県に広がっていったものとみられる。これ以外にも、ミヤヒンはもともと大阪府の河内方言として用いられたもので現在では門真市などの北河内や、富田林市などの南河内で使用されるが、八尾市などの中河内では、ミヤヒンから変化したミヤインが使用される。図3に現れる「見ない」の諸形式についてすべてどこで誕生し、どのように拡散していったかを推定することは難しいが、地域でまとまって分布する形式についてはほぼ説明が可能である。

さて、この「見ない」は上一段活用の動詞であるが、他の活用の動詞の否定形を含めて動詞否定形の代表例として見て頂きたい。なぜなら近畿地方では、他の活用の動詞の否定形式についても言語地図を作成したが、否定形式「ない」にあたる形式は、ほぼ近畿の地域毎で同じようなものが使用されているからである。上述したように周辺部の形式は～ンであり、ミン（見ない）のほかにも、イカン（行かない）、コン（来ない）、セン（しない）といったように同じ形式が他の活用動詞の場合にも現れる。これらの結果は、ほぼ図3で得られた結果と並行している。ただし、数多くある否定形式がいずれもまったく同じ分布域を持つわけではない。例えば、図3の「見ない」に下接する否定形式として和歌山・三重両県にはミヤンといった～ヤンという形式が用いられるが、これは5段活用の動詞には下接せず、もっぱら一段活用型の用言のみに下接する形式である。近畿地方での～ヤンの分布は、大阪府と和歌山県の県境から三重県を結ぶ地域にかけて用い

られるもので、和歌山県・三重県ではほぼ全域だが、大阪府、奈良北部等では用いられないことから近畿地方南部型の否定形式である。

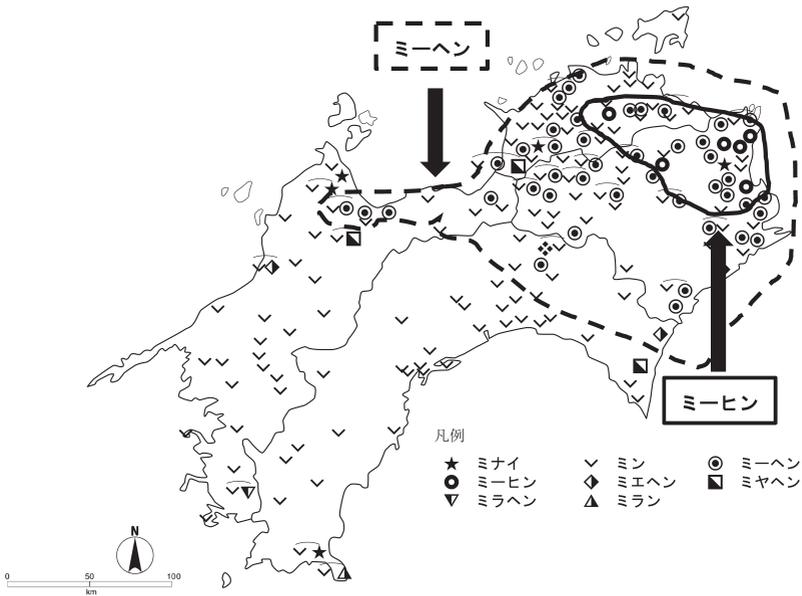
図3 見ない (岸江ほか編 (2017) から引用)



各形式の分布には特徴がみられる。例えば、ミーヘンは近畿地方北部に主に見られる形式で、南部地方での使用は少ない。この形式は京都で誕生し、周辺にひろがったものである。

ミンは先述のとおり、近畿地方の周辺部にあり、他の形式よりも古い形式であるとみられる。実はこの形式は、西日本では、もっともポピュラーな形式であり、東日本のナイ（ネー）とは日本アルプスを境界として相對峙してきた形式でもあった。四国地方においても今なお、もっとも優勢な形式である。ところで、四国地方では近年、徳島県などの東部地方に近畿地方で勢力のある方言形式が続々と押し寄せてまさに「上陸」し、四国地方西部にむけて伝播しつつあることがこれまでの調査で明らかになった。

図3 見ない（岸江ほか編（2011）から引用）



新たな伝播について説明すると、四国地方ではもともとミンだけが分布していたが、四国東部では近畿圏から新たな形式が伝播し、定着しだした。最初に四国地方に上陸したのはミーヘンだった。ミーヘンは四国地方西部へと徐々に領地を

広げたが、ミーヘンの後を追うようにして伝播してきたのがミーヒンであった。ミーヒンはこの言語地図での回答は少なく、はっきりと断言ができないので別の調査として行った高松市から土佐清水市間でのグロットグラム（地理×世代）調査および徳島市から池田町（現在、三好市）間でのグロットグラム調査の結果を交え、分析したい。

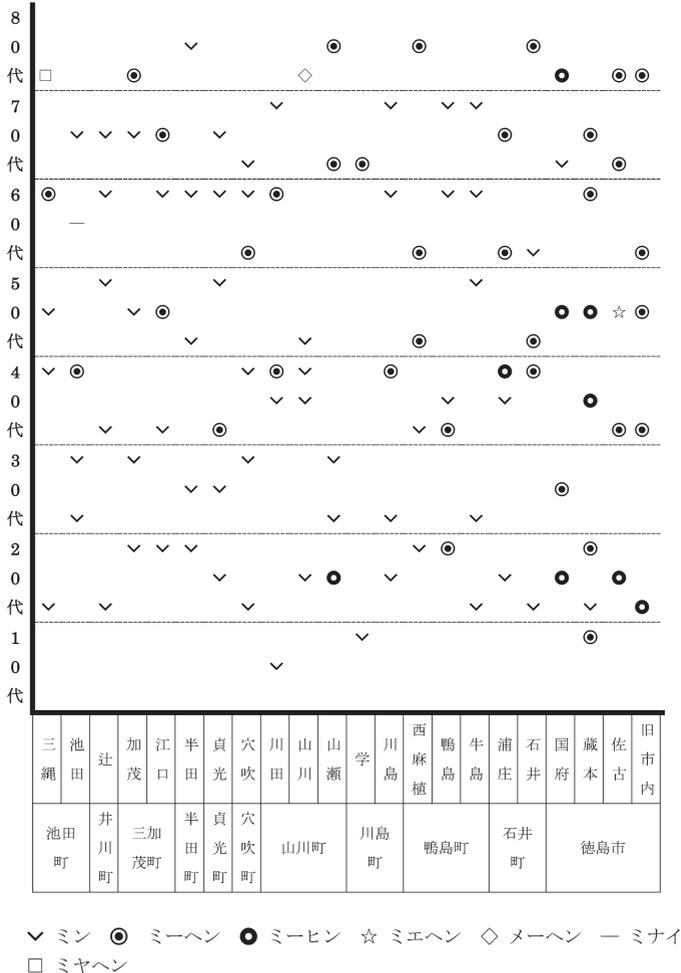
図4 見ない（岸江編（2011）から引用

世代		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代~	凡例
地点	世代								
香川 県	01 高松市菅沼町								★ ミナイ
	02 牟礼町牟礼								▽ ミン
	03 志度町北中浜								◎ ミーヘン
	04 白鳥町白鳥								● ミーヒン
	05 引田町引田							◎	▲ ミンヘン
徳 島 県	06 鳴門市北灘町				●	◎			■ ミヤセン
	07 鳴門市瀬戸町	◎				◎ ◎			□ ミヤヘン
	08 鳴門市旧市街	◎						◎	
	09 松茂町松茂町	●							
	10 徳島市川内町		▲		●			◎	
	11 徳島市北田宮								
	12 徳島市津田町	◎			◎			◎ ◎	
	13 小松島旧市街	●			●			◎	
	14 小松島市和田島					◎		●	
	15 那賀川町中島	◎		◎			◎		◎
	16 阿南市橋		◎	◎			◎		
高 知 県	17 阿南市椿泊					◎		◎	
	18 由岐町阿部				◎			◎	
	19 日和佐町西河辺	◎							
	20 牟岐町川長			◎		◎			
	21 穴喰町穴喰								
	22 安芸郡東洋町							□ ◎	
	23 壺戸市吉良川町							□	★
	24 安芸市土居								
	25 芸西村和食								
	26 高知市介良甲								
27 高知市十市								★	
28 高知市長浜									
29 土佐市高岡町									
30 須崎市西崎									
31 中土佐町久礼									
32 窪川町窪川									
33 佐賀町佐賀									
34 中村市鍋島									
35 土佐清水市越前									

図4の高松市から土佐清水市間グロットグラム調査は四国地方の沿岸に面した集落を調査したものである。これによると、香川県と高知県では、従来のミンが使用されているのに対して徳島県ではミンのほかにミーヘンとミーヒンがみられ

る。なかでもミーヘンが最も勢力がある。ミーヒンは50代以下での回答が中心となっており、ミーヘンよりも新しい形式であることがわかる。

図5 見ない（仙波・岸江・石田（2007）から引用）



さらに図5で示した吉野川流域グロットグラムでも、図3、図4の結果とほぼ同じとなった。吉野川流域の徳島県西部では、旧形式のミンを専用している一方、

徳島市内を中心とした吉野川流域の東部を中心に全域にわたってミーヘンおよびミーヒンの使用が確認された。ミーヘンの分布はすでに徳島西部域にも広がっている点が注目される。また、徳島市内からのミーヘンの拡散のあとを追うようにミーヒンが広がろうとする傾向が窺える。

近畿地方から四国地方への言語伝播として、徳島市など四国の東部地域への流入がもっとも多いと考えられる。古くから大阪-徳島間の航路は開けており、頻繁に行き来してきたことがその理由として挙げられよう。言語伝播の流れから考えると、近畿圏からの人々の流入があったように考える向きもあるが、むしろ逆で、徳島から多くの人々が、大阪など近畿圏に行くことが多かったことによる。言語が伝播する条件として、言語接触という現象が常につきまとうが、この言語接触の多くは徳島で起きたものではなく、大阪など近畿圏で起きたということもできよう。つまり、言語接触の結果、徳島に持ち帰ったのである。

5. さらに近畿方言との一致

言語伝播の一例として、最近の調査結果を一部取り上げただけであるが、古き時代から四国の方言は近畿方言の影響を多く受けてきたと思われる。例えば、徳島県下でよく用いられる入店時の折のあいさつ表現であるゴメンナシテは、三重県中勢地区で用いられている。また、四国各地で用いられる謝罪表現のコラエテ（「許して」の意味）は和歌山・三重県境付近で使用されており、これらはいずれも近畿中央部から各地に伝播し、近畿周辺部と四国地方に残存したものであるといえることができる。

これらの形式よりもさらに古いものとして、すでに近畿各地の方言からは姿を消してしまったが、徳島県三好市の東祖谷山には、かつて都で使われたことばが今でも根づいている。そのいくつかを紹介してみよう。

「がり」は、「～のところへ」「のもとへ」という意味で用いられる。

○医者がり 行く（医者のところへ行く）（祖谷）

この「がり」は、古典によく現れることばである。

○妹らがり 我が通ひ道の 小竹すすき 我れし 通はば 靡け小竹原（万葉集 巻七 1121番）

○夜 ふけて かへりたまふに、この女のがり いかむとするに（大和物語）
「がり」は古典で「万葉集」の時代には「妹らがり」のように接尾辞として用いられるが、平安以降、「この女のがり」というように文法化が起き、名詞として用いられるようになった。祖谷地方の場合は、万葉集の用法と同じである。

「え～ず」は、例えば、古典では、

○人語らひなどもえせず（『更級日記』）

○消え入りつつ、えもいひやらねば（『枕草子』）

など、「～することができない」という、不可能の意味で用いられる。近畿地方を含めて西日本各地では「よ一書かん」（書くことができない）、「よ一せん」（できない）という形で用いられることが多いが、これらは古語「え～ず」から変化した形式だと考えられる。祖谷地方のみならず、徳島県や高知県の山間部の方言では、この原形に近い「え（一）書かん」「え（一）せん」といった形が今でも残っており、注目される。

このほか、古語として「おます」や「たもれ」などについても取り上げておきたい。「おます」は大阪方言で「あります」を意味する丁寧動詞ではなく、「やる」「与える」の謙讓語「差し上げる」を意味する動詞として用いられている。

○ひとつ、おましよう（祖谷）。

「ひとつ、差し上げましよう」という意味である。

前田勇編（1964）『近世上方語辞典』によると、

○無念をはらしおまさう（享保13年『加賀国篠原合戦三』）

があり、「無念をはらして差し上げましよう」という意味である。また、「たもれ」は「下さる」を意味する「賜る」の命令形であり、「～してください」の意味で祖谷では用いられてきた。

○また来てたもれ（祖谷）

「たもれ」は八丈島や薩摩、琉球諸方言で用いられることでも有名である。

このように古語としてかつて中央で用いられたことばが四国地方の山間部に今でも残存していることから近畿地方からの伝播がけっして今に始まったものではなく、古くから延々と続いてきたものであことがわかる。

参考文献

大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図』

岸江信介編（2011）『大都市圏言語の影響による地域言語形成の研究』平成20～22年度科学研究費(基盤研究C)成果報告書』徳島大学日本語学研究室

岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美編（2017）『近畿言語地図』徳島大学日本語学研究室

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室

仙波光明・岸江信介・石田祐子・津田智史・石田愛・川島竜太・橋本夕子編（2007）『徳島県吉野川流域方言の動態』徳島大学国語学研究室

付記

本文は、令和元年（2019年11月29日）に四国学院大学で、学術講演会（文学部主管）として開催された講演の内容をまとめたものである。